

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：17102
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：25770151
研究課題名(和文)現代朝鮮語における<濃音化>の総合的研究

研究課題名(英文)A Study of <Tensification> in Modern Korean

研究代表者
辻野 裕紀(TSUJINO, Yuki)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：70636761
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代朝鮮語の濃音化(tensification)をめぐる諸問題を扱うものである。具体的には、合成語における濃音化を示す表記上のマーカーである間のsに関する朝鮮語母語話者の規範的認識度の調査、漢字語における流音後濃音化についてのインフォーマント調査、漢字語形態素の語彙的濃音化についてのインフォーマント調査を行なった。

研究成果の概要(英文)：This study discusses various problems on “tensification” in modern Korean. Specifically, the following three surveys were conducted: A survey on the recognition rate of Korean native speakers about “saisios” which is an orthographical marker of “tensification” in compound words, An informant survey on “Post Liquid Tensification(PLT)” in modern sino-Korean words, An informant survey on “Lexical Tensification(LT)” in modern sino-Korean words.

研究分野：言語学

キーワード：濃音化 間のs 合成語 形態音韻論 朝鮮語

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 24 年度の科学研究費(研究活動スタート支援)の研究課題で扱った n 挿入に引き続き、同じく、現代朝鮮語の代表的な「音韻添加現象」である濃音化(=喉頭音化)を扱うものである。

一口に濃音化と言っても、実は様々な次元のものが混在している。また、濃音化については、いかなる条件で生じるかなど、従前の研究では十分に説明されていない点が多く、朝鮮語教育にとっても障壁となっている事象である。そうした未解決の問題群を少しでも自らの手で明らかにしたいというのが、研究開始当初の動因であった。

2. 研究の目的

1. でも述べたように、本研究の目的は、現代朝鮮語の濃音化を旭上に載せ、先行研究では闡明されていない問題群について光を当てるものである。

具体的には、濃音化の表記上のマーカーである saisios についての母語話者(特に若年層ソウル方言母語話者)の認識度、流音後濃音化の実現様相、語彙的濃音化の実現様相、合成語における濃音化の生起条件などを明らかにすることが主たる目的である。

3. 研究の方法

研究の方法としては、既存のデータに依拠するのではなく、インフォーマント調査を行ない、そこで得られたデータに、音韻論的、形態論的解析を加えるという方法を採用する。

インフォーマントはすべてソウル方言話者、とりわけ若年層(20代)の話者である。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく3つに分けうる。「5. 主な発表論文等」の「雑誌論文」～の各々に対応させて述べる。

4.1. 「現代朝鮮語における言語規範と認識度—いわゆる saisios を対象に—」()

本論文は、若年層(20代)ソウル方言話者の saisios に対する認識度を闡明せんとするものである。

現代朝鮮語において、2つの形態素が接合する際、後行要素の頭音の平音が濃音(喉頭化音)と交替することがある。こうした現象は、合成

語における濃音化と称されるが、先行要素が母音で終わっている際には、先行要素の末音節のパッチム(終声字母)として's'が表記される。これを saisios と呼ぶ。つまり、saisios は濃音化の表記上(正書法上)のマーカーである。この saisios に関する言語規範が、朝鮮語母語話者、とりわけ、若年層のソウル方言話者にどの程度正しく認識されているかを明らかにするのが本研究の目的である。

全 120 名の若年層ソウル方言話者を対象に、全 126 語についてのアンケート調査を実施し、その結果、以下のようなことが明らかになった:

(1)分節音に着目すると、後行要素が鼻音や/i/で始まる場合の認識度が特に高い。

(2)語構造(音節数)に着目すると、先行要素が単音節の場合には saisios が挿入されるものと認識されやすく、複音節の場合には saisios が挿入されないものと認識されやすい。

4.2. 「現代朝鮮語の漢字語 流音後濃音化 浅析」()

本論文は、若年層(20代)ソウル方言話者 15 名をインフォーマントとし、朝鮮語の漢字語における流音後濃音化の実現様相について肉迫するものである。

流音後濃音化とは、現代朝鮮語の漢字語において、先行要素が流音/t/で終わり、後行要素が/d, j, s/のいずれかで始まる場合に、後行要素の頭音/d, j, s/が各々同一調音点の濃音(喉頭化音)/Δ, ζ, σと交替する現象を謂う。

こうした現象は、所謂二字漢字語、すなわち 2 音節漢字語においてはほぼ例外なく起きる。しかし、3音節以上の漢字語においてはそうとは限らない。例えば、先行研究が指摘するように、流音後濃音化は、「植物図鑑」、「生活水準」のような、4音節(2音節+2音節)の漢字語においては基本的に起きない。翻って、2音節以上+1音節、1音節+2音節以上という構造の3音節以上の漢字語においては、語によって起きたり起きなかったりする。また個人差も指摘されている。そこで、本研究では、特にこうした、2音節以上+1音節、1音節+2音節以上という構造の3音節以上の漢字語に焦点を当て、その実現様相を、インフォーマント調査を通して、分析した。調査語彙は全 306 語である。明らかにし得たことは次の如くである:

(1)全体的な傾向として、1音節+2音節以上よりも2音節以上+1音節の構造のほうが流音後濃音化が生じやすい。

(2)形態論的観点から照射すると、音節数の如何に関わらず自立性の高い要素同士の結合においては流音後濃音化が生じにくい。つまり流音後濃音化の実現如何は主に音節数よりも語構造(複合語か派生語か)が統べている。

(3)音韻論的観点から照射すると、1音節+2音節以上の場合は後行要素に、2音節以上+1音節の場合は先行要素に濃音が含まれる場合には、流音後濃音化が生じにくい。これは異化の一種であり、日本語の連濁(ライマンの法則)ともよく似ている。

(4)後行要素が/s/で始まるものは/d/や/j/で始まるものに比べて流音後濃音化実現如何に個人差が顕著な語が多い。

(5)なじみ度が低い語においては流音後濃音化が生じにくい。

4.3. 「現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化 —漢字語接尾辞‘-cek’ (的)を対象に—」()

本論文は、若年層(20代)ソウル方言話者15名をインフォーマントとし、漢字語の語彙的濃音化の実現様相について論ずるものである。

現代朝鮮語の漢字語においては、第2音節以降の形態素の平音の onset が濃音(喉頭化音)で実現することがある。こうした濃音化は、口音以外の子音(すなわち鼻音や流音)や母音の直後でも生起するため、音韻論的現象ではなく、形態音韻論的現象と目さねばならない(なお、朝鮮語において口音の直後の平音は自動的に濃音で実現する。これは音韻論的現象である)。本研究では、かかる濃音化を漢字語形態素の語彙的濃音化と呼ぶ。

先行研究では、語彙的濃音化が生じる漢字語形態素を次の3種に分類している:

類:語の構造如何にかかわらず濃音化を生じるもの(e.g. 価, 間, 件, 格, 科, 権, 券, 圏, 法, 数, 字, 点, 症, 証)

類:独立の語と結合する場合にのみ濃音化するもの(e.g. 課, 級, 気, 宅, 房, 病, 床, 性, 税, 状, 帳, 調, 罪)

類:独立の語と結合する場合には濃音化せず、それ以外の場合に濃音化を生じるもの(e.g. 的のみ)

上の分類から分かるように、「独立の語と結合する場合には濃音化せず、それ以外の場合に濃音化を生じるもの」は、{-cek}(的)のみであり、分布の面で特異な様相を呈している。また、言語事実を具に観察すると、話者によっては、自立的要素と結合する際にも{-cek}(的)の頭音は濃音化を起すことがある。そこで、本研究では、特に、対象を接尾辞{-cek}(的)に絞り、インフォーマント調査を実施した。調査語彙は全172語である。結果は次の通りである:

(1) 1音節 + -cek では先行要素の末音を問わ

ず語彙的濃音化を極めて起こしやすい。

(2) 2音節 + -cek では先行要素の末音と語彙的濃音化の間に相関関係がある。先行要素の末音が母音の場合には語彙的濃音化は悉皆生じず、鼻音の場合にも概して生じにくい。流音の場合には生じやすいが、先行要素に濃音を含む場合には異化作用により語彙的濃音化が防遏されやすい。

以上の研究成果は、いずれも既存の研究では明らかにし得ていない事柄であり、本研究によって朝鮮語の濃音化研究は、確実に一段階前進したものと考えている。また、こうした成果は朝鮮語教育の現場にも直接的に裨益しうる。

なお、当初の予定では、合成語(特に固有語)における濃音化の生起条件についての考察も行なうつもりであり、関連文献を渉猟したり、簡単なインフォーマント調査を実施したりもしたが、先行研究で述べられていること以上の、新たな成果は出ず、残念ながら、論文化までには至らなかった。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計3件):いずれも単著

辻野裕紀「現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化 —漢字語接尾辞‘-cek’(的)を対象に—」、『言語科学』51,九州大学大学院言語文化研究院言語研究会, 査読無, 2016年, pp.31-42.

辻野裕紀「現代朝鮮語の漢字語 流音後濃音化 浅析」、『韓国朝鮮文化研究』15,東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室, 査読無, 2016年, pp.95-114.

辻野裕紀「現代朝鮮語における言語規範と認識度 —いわゆる saisios を対象に—」、『韓国朝鮮文化研究』14,東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室, 査読無, 2015年, pp.39-63.

(学会発表)(計4件):いずれも単独発表

辻野裕紀「現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化 —漢字語接尾辞‘-cek’(的)を対象に—」,第17回東アジア日本語・日本文化フォーラム,於上海外国語大学(中華人民共和国),2016年3月26日.

辻野裕紀「現代朝鮮語の漢字語における濃音化 —流音後濃音化を中心に—」,平成27年度九州史学会大会朝鮮学部会,於九州大学箱崎キャンパス,2015年12月13日.

辻野裕紀「現代朝鮮語の漢字語 流音後濃音化 浅析」,第2回中日韓比較文化研究

国際学術研討会，於瀋陽航空航天大学
(中華人民共和国)，2015年10月18日。
辻野裕紀「現代朝鮮語における言語規範と
認識度 ―いわゆる saisios を対象に―」，
西南言語対照研究会，於西南学院大学，
2014年12月13日。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1)研究代表者
辻野 裕紀(TSUJINO, Yuki)
九州大学・大学院言語文化研究院・准教授
研究者番号：70636761

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。